

巻頭言 「キリストにある」

宇野 元

イタリアのピアニスト、マウリツィオ・ポリーニの演奏を40年聴いています。最初はLPで。ある時期からはCDで。書棚の一角に並ぶCDは、一人の音楽家の人生の証しのようにです。何度か、演奏会にも足を運びました。2001年のリサイタルが印象に残っています。その夜は、ショパンのみのプログラムでした。全曲が終わり、盛大な拍手ののちのアンコールでも、ショパンのエチュードをふたつ。ところが、彼がもういちどピアノの前に座ると、ドビュッシーの「沈める聖堂」が弾きだされました。小さな音が、しだいに大きく積み重なってゆきます。音はこの世で最もはかないもののひとつでしょう。しかし、確実な音の響きによって建物ができてゆく。ひろがってゆく。それはひとときのことでしたが、豊かな音の家のなかにある、という幸いな体験でした。

聖書の独特な表現のひとつに、「キリストにある」という言い方があります。私たちが手紙のおわりに「在主」とか「主にありて」と記すのは、これに倣うものです。英語では *In Christ*。新共同訳は、「キリストに結ばれて」と訳しています。「結ばれる」という日本語には人の心に響く力があり、イエス・キリストと私たちとの関係について聖書が語る豊かなイメージ、たとえば、ヨハネ福音書の葡萄の木と枝のたとえを喚起してくれます。一方、「にある」には、抽象的な感じが伴うものの、他の訳語に置き換えられない味わいがあると言えるでしょう。まず、単純に、豊かな空間性を示しています。また、客観的な事実を表わしています。私たちはイエス・キリストのうちにあります。キリストは、私たちのまん中におられるという以上に、私たちが中に入れられている——それは、神の懐のなかにあることと同じです。迷える羊であった私たちは神の愛のなかにある。そしてこの愛の空間は、ひろく、深く、豊かである。この事実を、イエス・キリストご自身の言葉と行動が示しています。さらに、イエス・キリストに起きた特別な出来事、その苦難と復活によって、この事実の確かさが証しされています。イエス・キリストの十字架による犠牲は、私たちを守るための真実な羊飼いのみわざでした。

私たちは、無情な世界に放り出されているのではなく、愛のなかにある。このことは、どんなシェルターのなかにあるよりも手厚く守られていることを意味しています。嵐の夜も、神の愛の家のなかには置かれています。